

「若者関係人口創出事業推進業務」

2022 年度調査報告書

目次

01 はじめに	3
02 調査概要.....	3
03 アンケート調査結果	4
04 ヒアリング調査結果	6
05 参与観察結果.....	8
06 まとめと展望	8
07(資料)アンケート調査データ	(別紙)

01 はじめに

葛巻町で昨年度から始まった Change Maker Study Program では、地方創生への関心の高い都市部の学生ら呼び込み、地域づくりに深く関わることによって葛巻町への愛着を育んで、地域の活性化及び継続的な若者の関係人口の創出、ひいては将来的な移住定住の促進をねらいとして様々な取り組みを行ってきた。

本調査では、葛巻町で活動した学生がどのようにすれば継続的な関係人口になり得るのか、また、学生の活動によってどのような効果が町や町民にあるのかを調査し、その結果を次年度のプログラム改善に生かすことを目的として実施する。

02 調査概要

【調査目的】

- ① どうすれば大学生スタッフ・参加者が継続的に関係人口になるのか（どのようなプログラムが関係人口化に寄与するか）
- ② どのような価値が大学生スタッフや参加者にあるのか。また、これからの自分/地域/社会づくりの原体験となる要素は何か
- ③ 交流によってどのような効果が町と町民にあるのか

【各調査概要】

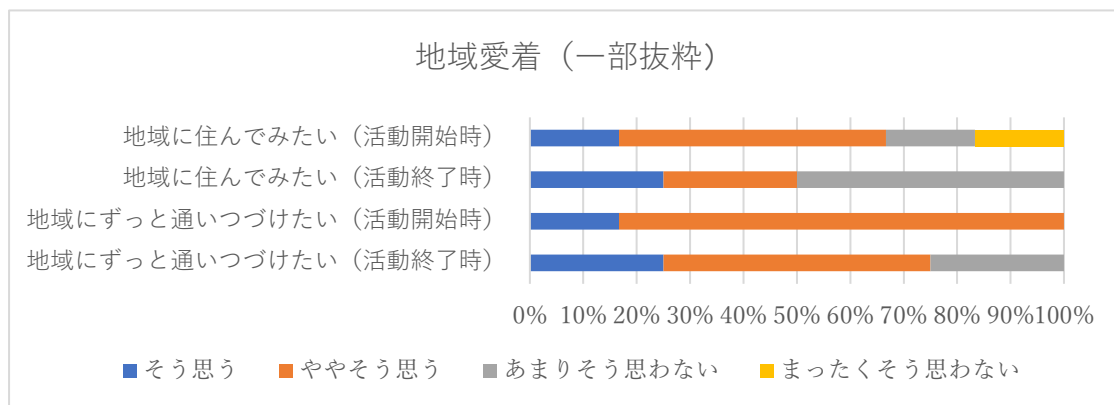
	アンケート調査	ヒアリング調査	参与観察
調査期間	2022 年 6 月～ 2023 年 1 月	2022 年 12 月～ 2023 年 3 月	葛巻現地入り時
対象	学生スタッフ/参加者	学生スタッフ/町民	学生/町民
方法	Questant を用いた アンケート調査	対面・オンラインに よるヒアリング調査	参与観察
回答数	第 1 回学生アンケート 6 人 第 2 回学生アンケート 4 人 参加者アンケート 4 人	町民 3 人 学生スタッフ 2 人	—

03 アンケート調査結果

【調査結果① 町への愛着（シビックプライド）に関する項目】

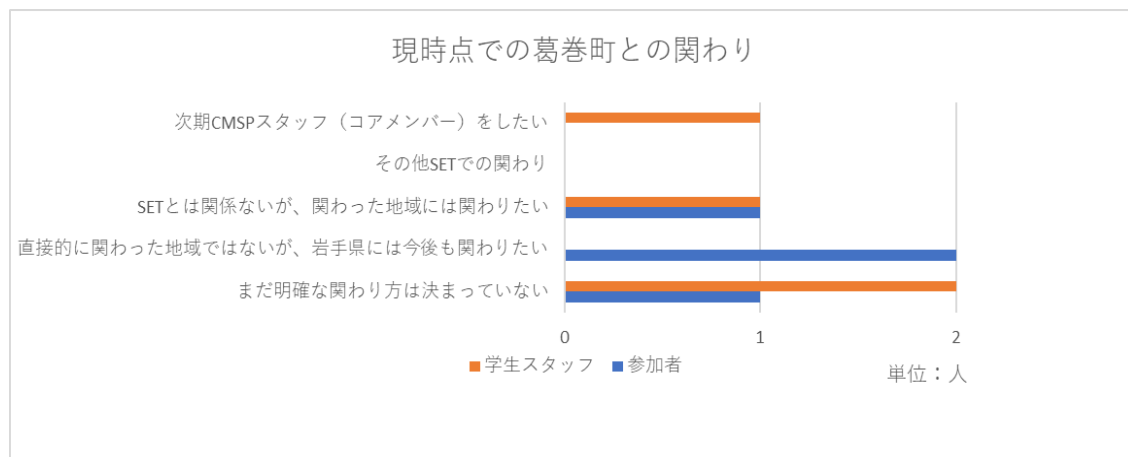
学生スタッフは活動開始時と終了時で「地域愛着」に関する項目に大きな変化はなかった。しかし、「地域にずっと通いつけたい」、「地域に住んでみたい」という質問項目が活動の開始時と終了時で同程度ということは、それだけ関係人口化に繋がる可能性が高いといえる。

一方、「地域参画」に関する項目は活動開始時からの低下が見られるので、学生の活動が地域社会（地域づくり）に深く関わっているという自覚を促す施策が必要である。



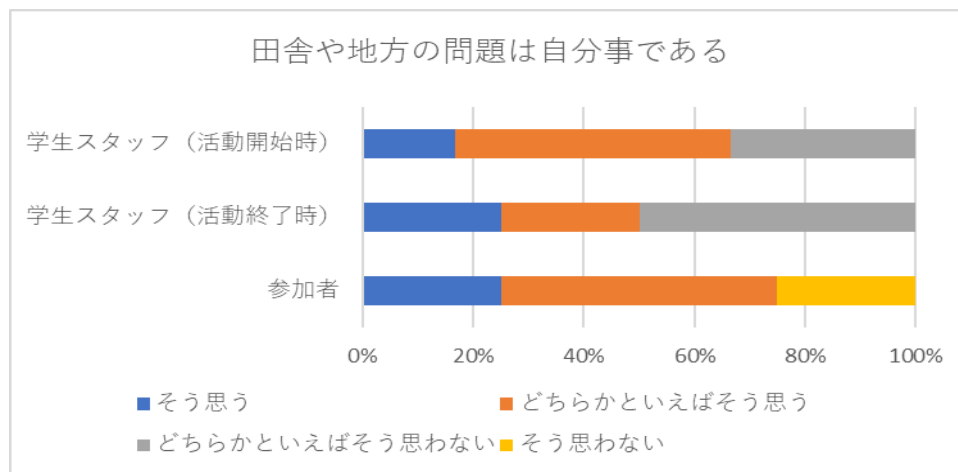
【調査結果② 関係人口に関する項目】

1 人を除き、学生スタッフ・参加者の全員が葛巻町と「今後も関わりたい」または「どちらかというとも今後も関わりたい」と回答した。ただし、現時点（2023 年 2 月現在）での葛巻町との関わり方については、回答が分かれた。学生スタッフ・参加者ともに葛巻町との関わりを継続したいと考えているが、具体的な関わり方の選択肢がない状況なので、出口戦略を立てる必要がある。



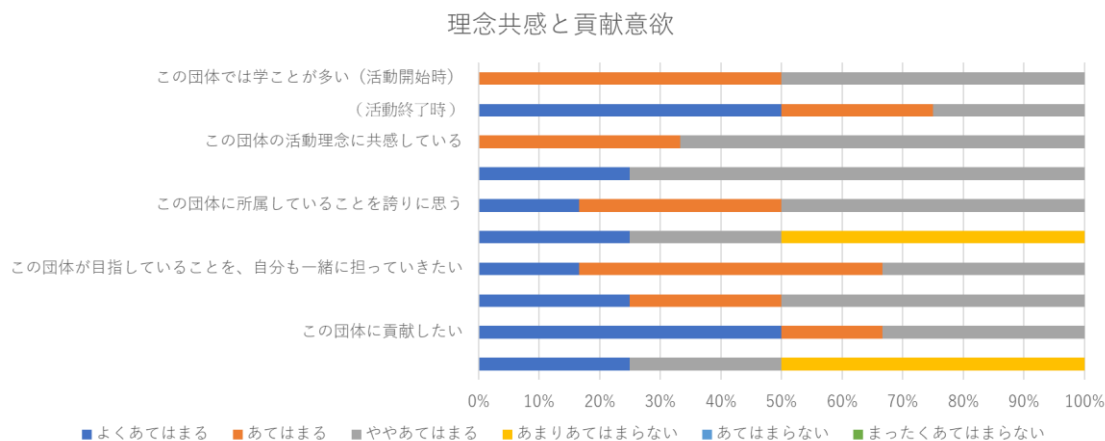
【調査結果③ 地域や社会への貢献意欲・貢献行動に関する項目】

「田舎や地方の問題は自分事である」という質問に対しては、学生スタッフ・参加者ともに同程度の回答を示している。田舎や地方の問題を自分ごとにできている一方で、シビックプライドの「地域参画」に関する項目は、学生スタッフでは活動開始時よりも低下しているので、地域参画や地域の活性化について考える機会と活動をより多く作り出すと、学生スタッフ・参加者の地域貢献意欲が全体的に上がる可能性がある。



【調査結果④ well-being に関する項目】

チームの理念共感と貢献意欲を測る項目においては、「この団体は学ぶことが多い」という質問項目が大幅に上昇した。学生にとって何が学びになっていて、それが活動にどのように影響するのかを見ることで、チームビルディングを向上させられると考える。



04 ヒアリング調査結果

【葛巻町民ヒアリング 学生との関わりについていただいた声】

・公務員 A さん

一葛巻の小学校では、オンラインの授業環境が充実しているので、都会の大学生と授業を作りたい。総合学習の時間は学年ごとにやっていることが違うが、大学生にしかできないことをやってもらえると連携する意味があるのではないかな。

一葛巻町は総ぐるみというか、地域ぐるみで活動をやってくれるのが強み。12 月のアクションに参加していた大学生は生き生きしているような印象だった。町で活動するうえでは、気を付けるべきポイントを押さえてもらえるといい。

・自営業 B さん

一大学生と接点ができて、新しい商品の発想につながる場所もあって、自分もすごく楽しい。大学生とワークショップをやっているとみんなも楽しそうで良かった。大学生には、ものづくりの体験を通して可能性の広がりを実感してほしい。

一住んでいるわけではない大学生がイベント企画（12 月のアクション）をやってくれるのは有難いし、自分にもできることは協力したい。PR にちょっと苦戦している印象があった。もっと地元の人が集まってくれるといいなと思う。

・自営業 C さん

一住民との距離感が変わってくるような活動をして親睦を深め、地域住民との接点を作っていくないと地域活性とはいえない。町の住民とのつながりはなかなか難しいところもあると思うが、地域の活性化が大事なのか、交流人口が大事なのか、葛巻町での立ち位置を再検討してほしい。

一大学生には、旅人のような外からの目のつけ所で、町の中にあるものを魅力的に見せられるような何かを開発してほしい。何かを提案しながら活動を継続し、町に残るものを生み出してほしい。

【まとめ】

- ① 町にあるものを生かして、大学生だからこそできる活動への期待が大きい
- ② 大学生の活動によって新しい発想が生まれ、楽しみを実感している町民がいる
- ③ 町民への活動の PR と町民との接点づくりの両方を推進する必要がある

【学生スタッフヒアリング】

・学生スタッフ A さん

—Change Maker Study Program は、まちづくりというよりも、ひとづくり、関係づくりという実感の方が大きい。町の人との交流やイベント企画によって成長させてもらっているという感覚。

—もっと現地入りが多い、あるいは長期滞在が多いと活動へのモチベーションが上がりそう。

—昨年度の活動については、そういうのもあったんだという程度の印象。来年もイベント企画をやってほしいという町の人からの声があったので、活動の引継ぎをしていくのは大事だと思う。

—町で一番印象に残っているのは夏祭りの花火。

・学生スタッフ B さん

—Change Maker Study Program は、自己成長というのが一番大きい。まちづくりではあるのだが、仲間との活動を通じて考え方が変わった。

—町のイベントなどに呼ばれる仕組みがあれば活動をしなくても関わりを続けやすいのではないか。

—町で一番印象に残っているのは夏祭りの花火。

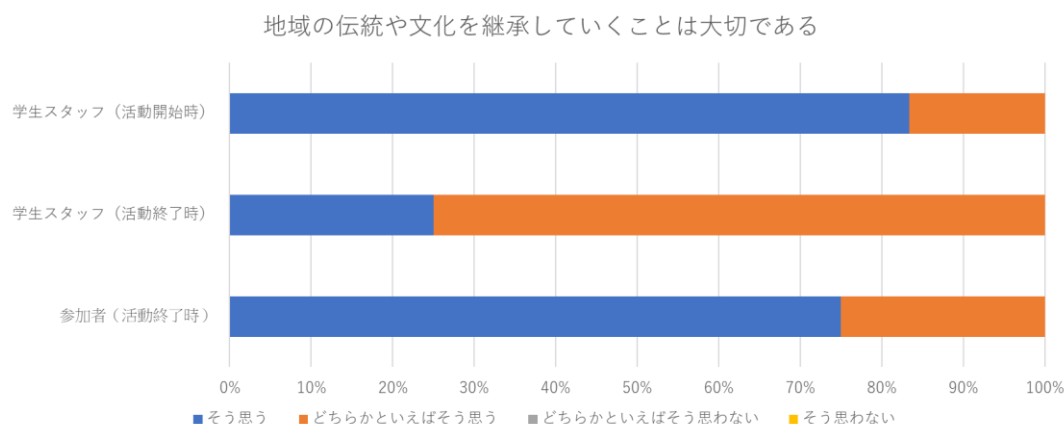
【まとめ】

- ① Change Maker Study Program は、まちづくりよりも仲間や町の人との交流を通じた自己成長が達成できるという実感の方が大きい。
- ② もっと現地入りの回数が多く、長期滞在できる方が活動へのモチベーションが上がる可能性がある。また、A・B さんともに夏祭りの花火が町で一番印象に残っていたことなので、町のイベントに参加することで町への愛着などが育まれることを期待できる。
- ③ 年度をまたいで活動の引継ぎをしていくと同時に、活動をしなくてもイベントなどに呼ばれる仕組みを作って、町へ関わり続けやすくすることが必要である。

05 参与観察結果

【葛巻町の歴史・文化・伝統との接続について】

今年度の活動の初期の段階では、葛巻町の町誌や町民からのヒアリングなどを参考にしながら町の歴史・文化・伝統への理解を深めていたが、活動の後半でイベント企画をする段階になるとこれらの蓄積が抜け落ちてしまった事実は否めない（アンケート調査においても、地域の伝統や文化の継承についての意識が醸成されたとは言えない）。そのことの是非を判断することは出来ないが、町の歴史・文化・伝統は葛巻らしさそのものなので、これらを意識した活動にすることで学生が葛巻らしさや葛巻で活動する意義を認識できるのではないかと考える。また、学生が町の歴史・文化・伝統についての知見を深め、それを町民に伝えることによって、町民の町への愛着形成にも発展する可能性がある。



06 まとめと展望・次年度に向けての提案

【① 関係人口として関わってきた学生のつながりづくり】

学生へのヒアリング調査によって、年度をまたいだ活動の継続性があまり感じられないということが分かった。そのため、これまで関係人口として葛巻町に関わってきた学生たちの継続的なつながりを作る施策が求められる。この施策は、Change Maker Study Program に参加後の学生に向けた出口戦略としても重要である。現状では、葛巻町に関わりを持ち続けたいと思っても、具体的な選択肢があまりない状況であることが今回のアンケート調査から判明している。

【② 葛巻町への愛着を高める活動づくり】

今年度の Change Maker Study Program では、学生にとって一番の価値は自己成長だった。まちづくりについては、活動を始めるきっかけとしてはまちづくりに関心を抱いているが、「地域参画」の実感値は薄い現状である。自己成長を達成できるという価値は維持しつつ、次年度は町への愛着や地域参画の実感値を高めるために、地域の行事への積極的な参加や町の歴史や文化、伝統、生活にもアプローチをかけるべきである。そのために、次年度は町の行事に合わせた現地入りの設計や長期間の滞在が望ましいと考える。

【③ 町や町民への波及効果の拡大のために】

町民へのヒアリング調査から、活動の PR や地域住民との接点が少ないという指摘を受けた。これに対しては、新型コロナウイルスによる自粛やマスク着用が緩和されたことや、前述のようなイベント参加や長期間の町での滞在ができる見込みがある環境なので、次年度は交流の場をより多く持てることが十分期待できる。

07 （資料）アンケート調査データ

（別紙参照）